

公開・非公開 の別	公開（一部非公開）
傍聴者の人数	0人

1 あいさつ

2 議題

(1) 令和6年度プロジェクトの進捗状況

○事務局

(資料1に基づき報告)

○委員

2点伺いたい。

1点目、人材定着・人材確保プロジェクトにおいて実施したアンケートの対象者はどのように選んだのか。

2点目、不登校児への切れ目ない支援体制整備プロジェクトの支援対象となった学生はどのように選んだのか。

○事務局

1点目について、市内の全ての障がい福祉事業所に対しアンケートへの回答を依頼した。

2点目について、不登校児への切れ目ない支援体制整備プロジェクトは令和5年、令和6年の2カ年のプロジェクトである。対象者の卒業後の進路選択について支援できるよう、中学2年生でかつ半年以上不登校状態にある方（32名）にアプローチを行い、承諾を得られた3名に対し支援を行っている。

○会長

人材定着・人材確保プロジェクトにおいて、本大学の授業に事業所の若手職員に出席いただいた。学生達にとっても参考となることが多く、とても良い取組である。

(2) 日中サービス支援型グループホームの事前評価について

○事務局

(資料2に基づき説明)

○委員

(一社) ハートリフォーレの利用者の中で、必ずしも訪問看護が2人体制である必要がないと思われる人でも、2人体制の場合がある。法人からも、常時2人体制であると言われた。支援体制について確認をお願いします。

○事務局

訪問看護は、基本的に医師の指示がなければ2名で対応ができない。ご意見として法人に伝える。

○アドバイザー

日中サービス支援型のグループホームは全国に広がっており、営利主義の事業所が多い。

思いを持って日中サービス支援型のグループホームを立ち上げるケースは少なく、また、一事業者がグループホームを運営することは大変なことである。

対象となる利用者は障がいが多い方が多く、生活に慣れるまでにかかなりの時間を要する。長期的な視点を持ち応援していけるとよい。

○事務局

各事業所の理念、思いを聞いている。応援していきたいと考えている。

○委員

障がいの重い方を対応してもらえることは大変ありがたい。一方で多くの施設で退職される職員が多い現状がある。

職員確保や入居予定者の状況はどのようなようか。

○事務局

職員の確保については、新規職員の採用や内部の職員の異動にて対応していくとのことである。

利用者の募集についても今後行っていく。

○委員

入居者を確保できない場合、運営が成り立たない等の問題が出てくる可能性がある。利用者の募集等しっかり進めて欲しい。

○事務局

本市に初めて日中サービス支援型ができる。需要は非常に高いと想定しており、相談支援事業所と連携して市内の方へ紹介していくということになると思われる。

また、人材確保の問題も非常に大きな課題であると認識している。特定技能の外国人を受け入れて、人材確保していくということも視野に入れているということも聞いている。

○会長

小規模で、かつ地元の法人が市内にグループホームを運営することは、とても大変なことである。自立支援協議会としても応援していく一方で、不祥事が発生する可能性も踏まえ、しっかりチェックやモニタリング評価などを行っていく必要がある。

(3) 個別事例から把握する地域課題の共有（非公開）

○事務局

（参考資料3及び資料3に基づき説明）

○委員

事例2について、医療的ケア児の対応はどの施設でも努力していかなければならない分野である。行政にも力を貸してもらいたい。

○委員

医療的ケア児については受け入れていく必要性を、学校としても認識し、受け入れに向けて努力をしているところであり、教員や学校現場の理解について深めていく必要がある。

受け入れにあたっての一番の課題は看護師の確保であり、本市の学校でも配置したいができていない。

入学時に看護師を配置できない場合、保護者の負担が増加してしまうことになる。

○委員

強度行動障害の方への精神科病院の関わりとしては、通院、入院、薬の処方が主である。入院については家族、施設のレスパイトとして活用されるケースが多い。また、一つの病院では対応が困難なため、病院を転々としている方もいる。

入院、薬の調整で良くなるものではない。不適切な対応を行う施設に行けば虐

待につながることもあり、どこで暮らしていくのか、難しい問題であると感じている。

○アドバイザー

強度行動障害は、自閉症や統合失調症の状態の一つであり、人口に対し一定数は必ずいる。

状態は人それぞれであり、育った環境が大きく影響している。成長する過程で失敗体験や怒られることで、自己肯定感が低下し、それらが積み重なった結果、不安や困っている状況で症状が出ている状態である。

成人を迎え、症状が固定してしまうと専門性を持っている人であっても対応が困難になる。

自閉症スペクトラム障害や統合失調症は思春期にあらわれやすく、今増加しているひきこもりの中にもいると思われる。専門家等との関わりがない状態が続くと、手がつけられない状態で問題が発出することとなり、結果として地域の課題が増えていくことにつながる。

地域での強度行動障害の理解の促進と幼少期から専門家等が関わるができる仕組みづくりが重要である。

○委員

強度行動障害は、障がいではなく、環境、社会が作ってきたものであると考えている。

幼児期の関わりと障害を持つ児童の心の納得を一つずつ積み重ねていくことで症状を治すことができる。

○事例提供者

A氏を受け入れるにあたり、生まれてから何をしてきたのか、何を経験してきたのか、何につまずいたのかを徹底的に掘り下げ、支援の組み立てを行った。

放課後等デイサービスなど幼少期から受けられるサービスは増えているが、高校生になると利用ができなくなり、別の事業所での生活が始まる。

子どもか大人かで隔てるのではなく、利用者の生活を支えていくため、教育や医療、福祉等が連携していくことが大切である。

○委員

早期発見が大切であることは理解できた。一方で、やむなく精神科病院に入院し拘束されることで、症状が悪化するケースがある。

地域で暮らすことについて話し合った際、医師から「本人が入院すれば家族3人は幸せに暮らせるが、地域に出ると3人が不幸になる」と言われた。確かに入

院で家族が安心する面もあるが、自分の子どもや家族をその環境に置くことが本当に良いのか、「誰かが不幸で他が幸せなら良い」ということでもない。

また、医療的ケア児の学校選びについても同様である。

インクルーシブ教育は障害者権利条約の中でも位置づけられており、子どもが行きたい学校を選び、地域の友達と共に学べる環境を整えることも重要である。

本人の意思を大事にしながら、子どもの時から社会の側でしっかりと受け止めていける地域を作っていくことが重要である。

○アドバイザー

開かれた場所で開かれた連携をして行くことが重要である。

○委員

生活介護で強度行動障害の方を受け入れを始めた当初は、スタッフ全員嘔まれ、叩かれ、走って追いかけられた。受け入れ開始から11年がたち、一番感じることには、本人の「経験値の少なさ」である。

ご家族が幼少期からご苦労されていて、少しでも迷惑かける場所に行かない避ける。本人の経験が少ないので、人混みに行くとパニックを起こしてしまう。

いろんな人がいるところでウォーキングを行うなど、積極的に外にでることが本人の経験を積むことにつながる。また、外にでることによって地域の人に知ってもらうことにつながり、地域の人からも挨拶してもらえるようになってきている。正しい障がいの理解が本当に大事であると実感している。

医療ケアが必要な方を事業所で受け入れているが、医療的ケアが必要な方は小さいときの受け入れ先がなく、この状況は大人になっても変わらない。また、年齢を重ねるほど生活介護の方が受け入れの枠は狭まってしまう。これは大きな課題だと考えている。

3 その他

次期ながふく障がい者プランの策定事業の進め方

○事務局

(資料4に基づき説明)

○会長

これで議事は終了する。

○事務局

次回は令和7年6月頃に開催予定。

(閉会)